國學院大學學術情報リポジトリ

唐宋の国書冒頭の書式の変化について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): 国書冒頭の書式, 皇帝敬問, 唐, 宋, 皇帝致書 キーワード (En): 作成者: 金子, 修一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000298

唐宋の国書冒頭の書式の変化について

金子修一

論文要旨

漢から唐までの中国王朝から異民族に発信された国書冒頭の書式は皇帝敬問・皇帝問・敕であり、唐代では皇帝敬問は対等な立場の異民族に発せられた。宋代になると、契丹及び金に対しては宋は対等な立場の相手に発する致書という文書を用いざるを得なくなった。但し唐代では、皇帝の承認の下に唐の臣下から吐蕃や回鶻の宰相に「致書」文言が発せられており、また吐蕃の宰相に発せられた「敕」文言の国書も存在した。本稿では、唐から五代・宋における国書冒頭の書式について、皇帝から君主への国書のみならず、唐の皇帝から吐蕃宰相への国

書、唐の宰相から異民族の宰相への国書も併せて検討し、唐代では皇帝敬問が皇帝の用いる最上級の文書表現であったのに対し、五代では皇帝謹致書が対等で、皇帝敬問はより下位の書式となり、宋代に至って皇帝敬問は姿を消し、宋と契丹・金との間では皇帝致書が双方の基本的な国書冒頭の文言となることを明らかにした。

【キーワード】「国書冒頭の書式」「皇帝敬問」「唐」「宋」「皇帝致書」

一 はじめに

77

本稿は、「皇帝敬問について―漢から隋の場合―」（『國學院大學大學院紀要―文学研究科― 第五一輯、二〇二〇年）（以下「前稿」と称する）の続編である。私は卒業論文を基礎にした「唐代の国際文書形式」で、唐朝から異民族の首長宛に発信された国書冒頭の形

式を整理し、それらが「皇帝敬問」「皇帝問」「敕」の三種類、三段階から成ることを明らかにした。即ち、それらの国書の発信された時期の唐と相手国との関係を考察し、皇帝敬問は唐と相手国とが対等の敵国関係にある場合に発信され、皇帝問と敕とは君臣関係にある場合に発信されると結論した。その後、唐代の公文書形式について一連の研究を公にした中村裕一氏は、「皇帝敬問」「皇帝問」は唐代の公文書では慰勞制書、「敕」は論事敕書に分類される文書であり、臣下に対して発信される文書である以上、「皇帝敬問」も対等の相手に発信される文書ではない、と指摘した²⁾。しかし以下にも触れるように、実例から見れば「皇帝敬問」は敵国関係で発信される文書であると解釈して差支えない。

一方、中村氏は『唐代史研究会報告』第Ⅵ集（一九八八年）の「慰勞制書の起源」で、唐代慰勞制書の起源を前漢に遡って検討し、漢代の「皇帝（敬）問某」は臣僚の上奏に回答し、臣僚を慰諭する目的の文書であったが、これは唐代の慰勞制書と通じるものであり、唐の慰勞制書は用途と外形の様式とにおいて漢代王言の色彩を残すものであった、と結論した³⁾。私も「唐代の国際文書形式」を発表した時から漢代の「皇帝敬問」文書の存在は承知していたが、漢から唐までの「皇帝敬問」及び「皇帝問」に関わる文書についてその後総合的に検討する機会を持たなかった。そこで、國學院大學の定年を前に前稿を発表し、国内の臣下に用いられる用例を含めて「皇帝敬問」「皇帝問」文書の発信される相手の地位の高さは漢代から南北朝の後期にかけてほとんど変化せず、明らかに敵国関係で用いられたと認められる例は漢初における匈奴との場合に限られるので中村氏の主張は成り立つとも言えるが、禪讓で帝位に即く際にも用いられるので「皇帝敬問」を全て同一の君臣関係の枠内で説明すべきではない、という点も指摘した。また、煬帝の大業三年（六〇七）における倭国の「日出処天子致書日没処天子」のように、隋代には国際関係で「致書」の用いられる例が出現するが、それは異民族側の発信した二例のみであり、唐代では国書としての「致書」の用例が確立していたとは言いがたいことも指摘した。

しかし、前稿はもともと唐代にも言及するつもりで執筆を開始したが、予想以上に分量が多くなったので隋代までの部分に止めて発表したものであった。そこで本稿では唐代の国書の特徴について改めて述べるが、唐の皇帝から異民族の君主に対する国書の基本的な内容は「唐代の国際文書形式」に述べてあるので、そこで取り上げなかった唐の皇帝から異民族の臣下に授与された国書冒頭の形式その他、同稿では詳しく述べなかつた諸例に言及する。また周知の如く、宋代では契丹（遼）と宋、金と宋との関係は基本的に対等とな

るので、唐代までにはほとんど無かった「致書」形式の文書が遼・金に向けて盛んに発信される一方、「皇帝敬問」の国書は姿を消してしまふ。このような、唐と宋との対外関係の変化の中における国書冒頭の書式の変遷について本稿で具体的に指摘する。その間の五代における国書の書式はその移行過程をよく示しており、これについては中西朝美氏に専論があるので、五代の国書の書式の諸例については中西氏に依拠して述べることにしたい。

二 唐代の皇帝敬問

唐代の国書冒頭の書式については、以下に掲げる『善隣国宝記』巻上の菅原在良勘文に引用された冒頭のみ諸例が、註(1)の拙稿で取り上げた突厥・回鶻(回紇)・吐蕃・黠戛斯の本文を含む諸例に先立つ初期の例となる⁵⁾。鳥羽天皇の元永元年(一一一八)に宋の商客孫俊明・鄭清が齎した文書について、その書式が旧例に叶っているか否か勘查が必要となり、従四位上・行式部大輔菅原在良が国書などの書頭の形式を隋から宋まで列挙した中に含まれているものである。

天智天皇十年、唐客郭務悰等來聘。書曰、大唐帝敬問日本國天皇、云云。天武天皇元年、郭務悰等來、安置大津館。客上書函、題曰大唐皇帝敬問倭王書。又大唐皇帝勅日本國使衛尉寺少卿大分等書曰、皇帝敬到(致)書於日本國王。

天智天皇一〇年(六七二)と天武天皇元年(六七二)との国書は、白村江の戦い以後に唐の百濟鎮將を介して唐から大和朝廷に発信された国書で、新羅の攻勢に苦境に陥った唐側が日本(倭国)に送った文書であり、二首の様に記録されているが実際には一首で、冒頭の書式は「大唐皇帝敬問倭王」であったと推測される。また、最後の国書の衛尉寺少卿大分は坂合部大分で、文武天皇大宝二年(七〇二)に派遣された第八次遣唐使の大使である。彼は次の第九次遣唐使と共に養老二年(七一八)に帰朝しているので、この国書は第九次遣唐使に授与されたと解されることが多いが、菅原在良勘文には「大分等」とあり、第八次遣唐使は大使の上に筆頭の執節使として粟田真人が任命されているので、この国書は第八次遣唐使に授与されたものと考えた方が理解しやすい。この遣唐使は、則天武后が皇太子とした中宗を伴い、長安二年(七〇二)十一月冬至に長安の南郊で郊祀を親祀する直前の一〇月に長安入りし(させられ)、武后の厚

遇を受けており、その時に「皇帝敬致書於日本國王」という破格の国書が授与されたものと解することは可能である。結局、冒頭のみ伝えられる日本に対する右の一例を除いて、唐代では「致書」文言の国書は存在せず、唐代で国書としての「致書」の用例が確立していたとは言い難い。突厥の場合には、「皇帝敬問」「皇帝問」の用例がそれぞれ「敕」と時期を違えて存在しており、「皇帝敬問」「皇帝問」を一律に慰勞制書の範疇で括るのは、それぞれの用法の差異を無視することになろう。

吐蕃については、張九齡の『唐丞相曲江張先生文集』（『曲江集』）には開元二年（七三四）から二四年の七首の「皇帝問贊普」「皇帝問吐蕃贊普」の国書、永泰二年（七六六）には「敕吐蕃贊普外甥」の国書があり、私はそれぞれ唐は吐蕃を臣下の立場に置いて発信したものと判断した。⁽⁸⁾しかし、『旧唐書』卷一九六上吐蕃伝上には、開元二年（七二四）の記事の続きに「吐蕃既自恃兵強、每通表疏、求敵國之禮、言詞悖慢、上甚怒之」とあり、唐代に「敵國之禮」という概念のあったことは確かである。その後、徳宗・建中四年（七八三）と穆宗・長慶二年（八二二）には会盟を行い、唐と吐蕃との関係は安定していった。建中二年に入蕃した唐の使節常魯・崔漢衡に対し、吐蕃の贊普は「來敕云、所貢獻物竝領訖、今賜外甥少信物、至領取。我大蕃、與唐舅甥國耳、何得以臣禮見處」と抗議し、続けて「乃邀漢衡、遣使奏定。魯使還奏焉、爲改敕書、以貢獻爲進、以賜爲寄、以領取爲領之」とあるように、唐は臣礼に基づく敕書を吐蕃の言う舅甥関係に適合する用字に改めた（同書同卷下・吐蕃伝下）。その後の『文苑英華』卷四七〇・翰林制詔五一・吐蕃書下の封赦「与吐蕃贊普書」の冒頭には「皇帝舅敬問吐蕃贊普外甥」とあり、註（一）の拙稿では武宗会昌年間（八四一～八四六）における敵国関係のものとしたが、その論証は不十分であったので、以下に改めて検討する。

その原文を略さずに掲げると以下の通りである。

皇帝舅敬問贊普外甥。尚屈立熱・論拱熱等至、得書并物具悉。外甥雄武挺生、英威特立、本邦奉化、隣國推賢、修仁義以保名、仗誠明而遂物。囊弓匣劍、無聞戰伐之音、被野綠原、不廢耕耘之具（一作作―原註）。儻非理化、孰見和寧、足觀盛業興行、人心率服、以茲觀政、深用慰懷。朕自守丕基、敬遵前訓、君臨四海、子育萬方、誠信必及於豚魚、恩澤不遺於草木。況外甥親臨極分、歲月滋深、雖山河阻修、而音耗鄭重、疆分二塊、地合一家。載覽來章、具悉深旨、所欲務存久要、頗見良圖。但能各重其歡、各厚其俗、戎車息駕、烽火不飛、共保封疆、兩均休戚、質神明而不惑、覽日月而常明、宜體至懷、永綏多福。承前朝覲人數、界首素有常儀、

公家之事、難於遠越。昨者尚屈立熟等到鳳翔、隨從共七十人、準舊例只合十人入朝。今緣兩國和好、不同元和已前、遂令三十五人赴闕。自今已後、所遣使須遵舊例、不得刺史（吏？）差人、勿令交馬之後、妄有論請。拱熟等還蕃、有少物、數如別錄。

以上の文には年代を特定させるような文言はない。その眼目は「昨者尚屈立熟等到鳳翔、隨從共七十人、準舊例只合十人入朝」以下にあり、吐蕃の使者の尚屈立熟等が総勢七十人で鳳翔に来たのに対し、以後は旧例に従って入朝する使者は十人に絞るように、と要求したことにある。「橐弓匣劍、無聞戰伐之音、被野綠原、不廢耕耘之具」、あるいは「戎車息駕、烽火不飛、共保封疆、兩均休戚、……宜體至懷、永綏多福」という文言からは、当時の唐と吐蕃との間は極めて安定していたことが窺われる。

『旧唐書』卷一六八・封敖伝に拠れば、封敖は武宗の会昌（八四一～八四六）の初めに員外郎知制誥から翰林学士となり、中書舎人を拝している。宣宗が即位して李德裕が宰相を罷免されると礼部侍郎に遷り、大中二年（八四八）には貢部を典して多く文士を擢した。『新唐書』卷一七七の同伝では、翰林学士となつてから三遷して工部侍郎となり、幾くもなく御史中丞を拝したが、誤つて死罪を縦して工部侍郎に復し、宣宗の大中（八四七～八五九）中には平盧・興元節度使を歴任した。この両伝の記載には食い違いもあるが、いずれの記事も生かすとすると封敖の翰林学士や中書舎人の在任期間は長くはなかつたであろう。『唐代詔勅目録』（東洋文庫、一九八一年）はこの文を会昌中に掲げ、参考に『旧唐書』吐蕃伝下の「會昌二年（八四二）、贊普卒」の記事を挙げる。この記事の続きには「十二月、遣論贊等來告哀」とあり、『新唐書』吐蕃伝下には「會昌二年、贊普死、論贊熱等來告」、『資治通鑑』卷二四六・会昌二年一二月條には「丁卯、吐蕃遣其臣論贊熱、來告達磨贊普之喪」とある。この贊普の死については佐藤長氏の專論があり、死去したのは彝泰でそれを継いで達磨が立ったのが会昌元年（八四一）であつて、これに従えば会昌二年一二月には達磨ではなく彝泰の死を告げる使者が来たことになる。『唐代詔勅目録』は、この論贊熱の來朝を封敖「与吐蕃贊普書」に関連附けたのであろう。しかし、この文の使者は尚屈立熟・論拱熟であつて論贊熱ではなく、またこの文自体に贊普の死に触れる所は全くない。論贊熱の派遣に対しては唐朝は将作少監李璟を弔祭使として遣しており（旧伝、新伝では将作監）、この文はその後の吐蕃による通常の使者派遣に対する返書と見て良いであろう。

後述するように、憲宗朝（八〇五～八二〇）に入つてからの唐―吐蕃関係は比較的安定する。後に引く憲宗朝初期の「代王佖答吐蕃北道節度論贊勃藏書」及び「代忠亮答吐蕃東道節度使論結都離等書」にも、それぞれ「兩國」の語が見える。従つて、この文の「皇帝

敬問」の表現もそうした状況に対応していると見て問題なく、冒頭の「皇帝敬問」は敵国関係に用いられる、と解釈してもそれほど無理ではないであろう。この文は新しい達磨賛普(ダルマ王)に対して使者派遣の規範の遵守を要求したもので、発信は会昌三、四年頃だったのではなからうか。回鶻に代わって黠戛斯が「皇帝敬問」の国書を受けるようになるのも、会昌三年から会昌四年のことである。唐代の「皇帝敬問」文書は、同時期の二者に対しても発信可能であったのであろう。

九世紀半ばに吐蕃と回鶻とは相次いで衰えるが、黄巢の乱(八七四または八七五〜八八四)などの反乱の頻発によって、九世紀後半には唐朝自体も急速に弱体化する。楊鉅『翰林学士院旧規』(宋・洪遵編『翰苑群書』上所収)は、末期の唐朝から見た国際秩序を伝えた貴重な史料である。本書は八八三年頃から九〇三年までの制敕などを編纂したもので、編纂年次は九〇四年かそれ以後の同年に極めて近い時期であり、その中に次の一文がある。

新羅・渤海書頭云、敕某國、云王、著姓名。……黠戛斯書、……書頭云、敕黠戛斯、著姓名。……回鶻天睦可汗書頭云、皇帝舅敬問回鶻天睦可汗外甥。……吐蕃使首領書頭云、敕。……南詔驃信書頭云、皇帝舅敬問驃信外甥、尾與回鶻書一般。

このうちの回鶻天睦可汗と昭宗との舅甥関係については土肥義和氏に綿密な考証があり、それに依拠して再説すると以下の如くである。

焯煌発見ペリオ将来漢文文書「公文書啓規範集(書儀)」(擬題、P三九三二)の、「表本」と題記された上表文の文例二種のうちの一つには「去光化年初、先帝遠 頒冊禮、及 恩賜無限 信幣、兼許續降 公主、久(不?ー)土肥氏に拠る) 替懿親、初聞鑾駕東遷(下略)」とある。「鑾駕東遷」は、天復四年(九〇四)に昭宗が朱全忠によって洛陽に拉致されたことを指す。「光化年初」は光化元年(八九八)であろう。その頃に昭宗は回鶻に公主降嫁を約していたのである。回鶻が八四〇年代に壊滅した後、西走した一派はバルハシ湖の南方地域に、別の一派は東部天山一帯に(西州回鶻)、さらに別の一派は甘州高原に(甘州回鶻)勢力を張ったが、土肥氏は天睦可汗は甘州回鶻の可汗であったと見るのが適当であり、天睦可汗は回鶻国固有の可汗号ではなく、光化年初に昭宗から冊封(冊礼)を受けた人物の可汗号であろう、とする。昭宗は乾寧四年(八九七)一月に淑妃何氏を皇后としたが(『資治通鑑』卷二六一、『新唐書』昭宗紀では翌年四月)、翌年に朱全忠が洛陽宮を営んで昭宗を迎える意志を示すと、閏中の李茂貞と韓建とは恐れて昭宗を奉じて八月に長安に戻り、昭宗は天下に赦して光化と改元した。「表本」に「光化年初」とあれば同年七月以前のこともありうるが、昭宗が天睦可汗を

冊立し公主降嫁を許諾したのは長安帰還以後である、と考えるのが妥当であろう。一方で、僖宗の中和三年（八八三）には安化長公主の南詔への降嫁が決まった（『資治通鑑』卷二五五・同年七月條）。黄巢の乱の終熄した翌年の光啓元年（八八五）三月に、僖宗が成都から長安に戻るとこの件は沙汰止みとなったが、南詔の助力を期待して、一度は安化長公主の降嫁が唐朝廷によって決定されたことは間違いない。

以上のように、回鶻（甘州回鶻）や南詔に対する「皇帝舅敬問……外甥」の国書は八八三年から八九八年までの十五年ほどの間に発信されたと特定できるが、それらの表現は八四〇年代の吐蕃贊普に対する国書の書式と全く同じである。九世紀半ば以降、唐では婚姻関係（公主降嫁）を結んだ相手には、「皇帝敬問」の書式で臨むことになったと言える。またここから、唐が滅亡直前まで「皇帝敬問」以下の書式で異民族を統御しようとしていたことが窺われ、この点は宋の事例と対比する上で注意しておく必要がある。なお、日本の『延喜式』卷一二・中務省の慰勞詔書式には「天皇敬問云云」とあり、その原注に「大蕃國云天皇敬問、小蕃國云天皇問」とある。しかし、日本の国書には「天皇問」の用例はなく、新羅・渤海に対しても「天皇敬問」の書式で臨んでいた。

因みに、『新唐書』卷七七・后妃伝下・順宗莊憲皇后王氏伝には

后謹畏深抑、外家無豪絲假貸、訓厲内職、有古后妃風。（元和）十年（八一五）崩、年五十四。遺令曰、皇太后敬問具位。萬物之理、必歸於有極。未亡人嬰霜露疾、日以衰頓、幸終天年、得奉陵寢、志願獲矣、其何所哀。易月之典、古今所共、皇帝宜三日聽政、服二十七日釋、天下吏民、令到臨三日止。宮中非朝暮臨無輒哭、無禁昏嫁祠祀、飲食酒肉。已釋服、聽舉樂、侍醫無加罪、陪祀如舊制。

とある。順宗の王皇后が次の憲宗朝に崩御した時、自分のために憲宗以下が厚葬に従事することが無いように指示した、いわば薄葬の令である。国書ではなく、『新唐書』では本文が改筆された例も多いが、「敬問」とある皇太后の貴重な令（遺令）として紹介しておく。

三 唐代の致書文書

次に、唐朝から異民族に発信された「致書」文書を取り上げる。管見では以下の三例があるが、いずれも皇帝以外の官僚から首長以外の人物に送られたものである。

四部叢刊本『白氏長慶集』卷一三（『全唐文』卷六七四）

① 代王佖答吐蕃北道節度論贊勃藏書（中華書局本『白居易集』卷五六では奉勅撰）

大唐朔方靈鹽豐等州節度使檢校戸部尚書寧塞郡王王佖致書大蕃河西北道節度使論公麾下

同書卷一四（『全唐文』卷六七四）

② 代忠亮答吐蕃東道節度使論結都離等書奉勅撰

大唐四鎮北庭行軍涇原等州節度使檢校工部尚書兼御史大夫丹陽郡王朱忠亮致書大蕃東道節度使論公・都監軍使論公麾下

『李文饒文集』卷八・制詞（『全唐文』卷七〇七）

③ 代劉沔與回鶻宰相頡于伽思書

會昌三年八月二十日大唐河東節度使檢校右僕射劉沔致書于九姓回鶻頡于相公閣下

このうちの③については筆者も既に「唐代の国際文書形式」で触れており、齊会君氏の早稲田大学博士（文学）論文『九世紀前半の東アジアにおける国際文書の研究』（二〇一九年）には李徳裕の『李文饒文集』（『會昌一品集』）の回鶻・黠戛斯関連の文書を積極的に用いた論が展開されているので、本稿では白居易の①②についてのみ瞥見しておく。

①の王佖については、『旧唐書』卷一三三・李晟伝、及び『新唐書』卷一五四・同伝に附伝があるが、朔方・靈・塩節度使になった時期については、共に「元和中」とあるのみである。一方、『旧唐書』憲宗紀上・元和四年（八〇九）六月丁丑條に「以右衛上將軍王佖爲靈州大都督府長史、靈・鹽節度使」とあり、同紀下・元和八年七月條に「丁卯、以振武節度使李光進爲靈州大都督府長史・靈武節度使」、また同年九月壬申條に「以前朔方靈鹽節度使王佖爲右衛將軍。將相出入、翰林草制、謂之白麻。至佖、奏罷中書草制、因爲例也」

とあり、元和四年に靈塩節度使に任じられ、元和八年にその任を離れていたことが判る。^①②の朱忠亮については、『旧唐書』憲宗紀上・元和三年（八〇八）三月條に「庚子、以定平鎮兵馬使朱思明爲四鎮・北庭・涇・原等州節度使」とあり、同年四月癸丑條には「賜朱思明名曰忠亮」とある。また、同紀下・元和八年（八一三）一〇月條には「辛卯、涇原等節度使朱忠亮卒」とあり、朱忠亮は元和八年に卒した。よって、①②は元和三年から八年までの数年間に発信されたことが判る。『旧唐書』卷一五一・朱忠亮伝では「憲宗即位、加御史大夫。築臨涇城有勞、特加檢校工部尚書・涇原四鎮節度使、仍賜名」とある。『新唐書』卷一七〇・朱忠亮伝ではやや相違があり、「築潘原城有勞、改封丹陽、卒」とある。朱忠亮（当時は朱思明）は、建中二年（七八一）の朱泚の乱の時に徳宗の蒙塵した奉天に駆けつけて東陽郡王を授けられているので、『新唐書』の記事に従えば②の発信時期は元和八年に近い時期となろう。

吐蕃は安史の乱後に唐への攻勢を強めたが、徳宗の建中四年（七八三）における清水の会盟で唐と吐蕃との勢力圏を決定した。その後、貞元三年（七八七）の平涼の会盟では伏兵を用いて唐の使者達を拉致するなどしたが、翌年の貞元四年以降に吐蕃に服属していた南詔が吐蕃から離反して唐に帰属する動きを示し、国内でも若年の贊普の交代が相次ぐと、唐と吐蕃との関係は軍事衝突から平和的な使節の交換が目立つようになった。註（11）所掲李鴻賓『唐朝朔方軍研究』に拠れば、貞元十九年（八〇三）以降に双方の使者の往来が顕著に増加し、この状態は唐の辺將の侵犯が頻発し、憲宗の元和一三年（八一八）に吐蕃が武力侵攻を再開し出すまで続いた（同書第八章）。例えば、元和五年（八一〇）には吐蕃が遣使して、平涼の会盟で吐蕃に拉致されて没した鄭叔矩・路泌の柩を送っている。このことに関連して、元和四年には後に触れる白居易の「与吐蕃宰相鉢闡布書」（『文苑英華』卷四六九）、元和五年には「与吐蕃宰相尚驕心兒等書」（同書卷四七〇）が発信されている。①②もこのような状況で発信されたのであるが、②の標題の末尾には「奉勅撰」と記されている。奉勅撰とは皇帝の意志に基づいて記された、^②という意味であり、②は唐朝中央の意向を辺將の名で発信したものである。①②とも元和四、五年頃に時期を同じくして発信されたものと考えて良いのではなからうか。

紙数の関係でそれぞれの全文の紹介は割愛するが、①には初めに「遠來辱書、兼蒙厚贖」とあるので、この文は吐蕃側からの来書に対する返書である。その中に

今聖上徳柔四海、威及萬方、雖外國蠻夷、尚皆率伏。況中華臣妾、敢有不恭、豈假彼蕃欲相借助、誠愧厚意、終訝過言。承去年出

師、討逐廻紇、其間勝負、此亦備知、不勞來書、遠相示及。

とある。その前に、唐の辺境に居る党項に関する「亦聞闖彼財貨、亡命而去、獲利而歸」という文がある。唐が異民族に授与する国書では「彼」とあるのは相手側、「此」とあるのは唐側のことである。右の文で「豈假彼蕃、欲相借助」とあるのは、唐に服属した党項がしばしば吐蕃の辺境に侵入して掠奪するのに吐蕃が唐に助兵すると申し出たのに対し、やんわり拒絶したのである。また、「承去年出師、討逐廻紇」というのは、『新唐書』吐蕃伝下に「憲宗初、……。後比年來朝、然以五萬騎入振武拂鶻泉、萬騎至豐州大石谷、鈔回鶻還國者」という事件を指すのであろう。次に元和五年の記事があるので、これは元和四年に起きた事件である。承はそのような吐蕃の通知を承知した、という意味であろう。以下の省略した部分は、回鶻の生口（捕虜）等に対するその後の措置について記している。

次に②であるが、この文の冒頭には「專使辱問、悚慰良深」とあるので、吐蕃の東道節度使論結都離等からの来書に対する返書である。次に友好関係に関する型通りの挨拶があるが、その後「忽枉來問、稍乖素誠、雖有過言、敢以衷告」とあり、吐蕃側の間違った言い分に対しては反論する必要がある、とする。続けて「來書云、類見燒草、何使如然者」とあって、唐側が辺境で火を放って枯草を焼いていることに対する吐蕃側の抗議を記し、これに対して「至如時警邊防、歲焚宿草、蓋是每年常事、何忽今日形言」と述べ、辺境防備のために宿草を焼き払うのは毎年のことであって、今さら言い立てるようなことではない、とする。焚草は境界を越える牛馬の移動にも影響を与えているようであるが、その点は省略する。次に、「又云、去年忽生異見、近界築城者。且國雖通好、軍不撤警、近邊修緝、彼此尋常。況城是漢城、地非蕃地、豈乖通理、何致深疑……。須會報牒、彼已息詞。今又再言、寧無慙德」とあり、これがこの文書の眼目である。即ち、唐が辺境に築城したことに對して吐蕃側が抗議し、これに對して唐の国内の築城に對して吐蕃側が異を唱える筋合いはない、と言っているのである。「須會報牒、彼已息詞」とあるので、前にもそのような抗議はあったのであろう。

既に引いたように、『旧唐書』卷一五一・朱忠亮伝では「憲宗即位、……築臨涇城有勞、特加檢校工部尚書、涇原四鎮節度使、仍賜名」とあり、『新唐書』卷一七〇・同伝では「築潘原城有勞、改封丹陽、卒」とあった。『旧唐書』卷三八・地理志一・関内道涇州條に「良原 隋陰盤縣、天寶元年改爲潘源縣、界有潘原廢縣」とあり、『新唐書』卷三七・地理志一・同條「潘原」の原註には「本陰盤、天寶

元年更名、後省爲彰信堡。貞元十一年復置」とある。おそらく、潘原県はいったん廃されて徳宗の貞元二年（七九五）に復置され、その間に荒廢した城壁を後に朱忠亮が改修したのである。臨涇城・潘原城の修復は、涇原四鎮節度使または丹陽郡王を与えられるだけの重要な功績であったのである。辺境防備の体制について相手側が警戒するのは当然であり、その点ではこの時の唐と吐蕃との関係は決して友好一辺倒ではなかったことが窺われる。辺境での摩擦はありながら、小康状態を保っていたのが徳宗朝後期から憲宗朝の唐―吐蕃関係であったのである。なお、当時は安西四鎮と北庭都護府とは吐蕃の勢力下にあった。従って、朱忠亮の四鎮北庭行軍涇原等州節度使のうち、四鎮北庭節度使はいわば加衛であり実際には彼は涇原に駐屯していた。しかし、唐朝は四鎮北庭節度使を建前上の正規の官として、涇原節度使の方を行軍と称して臨時の官の扱いをしていたのである。

以上は唐の節度使から吐蕃の地方官（節度使）へ発信された文書であるが、②に奉勅撰とあり、実際には唐の皇帝の承認の下に起草された文書であった。これは回鶻宰相に送られた③も同様である。このほか、『文苑英華』には唐の皇帝から宰相に送られた勅書が収録されており、巻数・著者・標題及び冒頭は以下のようなようである。併せて、私の大学院の授業で検討した起草の年次についても括弧内に記しておく。

卷四六九・陸贄「勅吐蕃將相書」―勅尚覽鑠（貞元二年（七八六）七―八月）、「勅吐蕃宰相尚結贊書」―勅尚結贊（貞元二年八月）、
「勅尚結贊第三書」（貞元二年八月）、白居易「與吐蕃宰相鉢闡布書」―勅吐蕃宰相沙門鉢闡布（元和四年（八〇九）冬）、卷
四七〇・白居易「與吐蕃宰相尚綺心兒等書」―勅吐蕃宰相尚綺心兒等（元和五年（八一〇）七月）

以上、いずれも対象は吐蕃の宰相であり、白居易の二書が元和四、五年に集中しているのも興味深い。徳宗朝から憲宗朝にかけての唐―吐蕃関係については、以上のような国書を精細に吟味すれば、より豊富な事実が引き出せるのではなからうか。因みに、以上の「勅吐蕃宰相尚結贊書」「勅尚結贊第三書」については、『全唐文』卷四六四・陸贄（四部叢刊本『陸宣公集』では卷一〇）では「賜尚結贊第二書」も収録されているが、この第二書は冒頭の部分を缺くと同時に、第一書と同文の部分や第三書とも内容的に重なる部分もあるので、草稿として記されたのみの不完全な勅書であり、陸贄の文集には収録されても、『文苑英華』には収録されなかったものと考えられる。¹³⁾

四 五代の国書

五代の国書については中西朝美氏の専論があり、それに依拠して用例を掲げると以下のごとくになる。初めに、後唐と十国の呉との間には『十国春秋』卷三・呉本紀・順義三年（九二三）一〇月戊戌條に

唐以滅梁來告、始稱詔、我國不受。唐主隨易書、用敵國禮曰、大唐皇帝致書於呉國主。王……又遣使張景報聘、稱大呉國主上書大唐皇帝。辭禮如賤表。

とある。これには『資治通鑑』や『旧五代史』との間に多少の異同があるが、後唐の莊宗からは敵国の礼として「皇帝致書」の形式を用いたことになる。また、『旧五代史』卷二二六・王衍伝には

唐莊宗平梁、遣使告捷於蜀。蜀人恟懼、致禮復命、稱大蜀國主致書上大唐皇帝。詞理稍抗、莊宗不能容。

とある。これも右と同様に後唐建国時の同光元年（九二三）のこととなるが、逆に前蜀の王衍が「國主致書上大唐皇帝」という書を出しながら、内容的にはそれほど遜ったものではなかったのである。また南漢についても、『旧五代史』卷一三五・劉陟伝に同光三年の後唐の建国に関連して

及聞莊宗平梁、遣僞宮苑使何詞來聘、稱大漢國主致書上大唐皇帝。

とある。五代十国時代の十国は基本的に五代の諸王朝に臣属しているので、「致書上皇帝」の書式をとることになるのであろう。これに対し、敵国の礼を用いる場合は「皇帝致書于國主」の形式になるのであり、「上」一字を挿入するか否かで、差出人と受取人の立場はかなり相違することになる。

周知のように、五代中期の後晉は後唐を滅ぼす際に契丹の援助を求め、燕雲十六州を契丹に割讓して臣従し、やがて後晉に有利な情況を作り出そうと画策して却って契丹に滅ぼされる。後晉と契丹との間の国書はないが、『資治通鑑』卷二八一・後晉紀二・高祖天福三年（九三八）七月戊寅條には次のような記事がある。

帝事契丹甚謹、奉表稱臣、謂契丹主爲父皇帝。每契丹使至、帝於別殿拜受詔敕。……其後契丹主屢止帝上表稱臣、但令爲書稱兒皇

帝、如家人禮。

また、『旧五代史』卷一三七・契丹伝・会同元年（九三八）條にも

既而德光（耶律德光、太宗）請晉高祖不稱臣、不上表、來往緘題止用家人禮、但云兒皇帝。

とある。つまり、後晉建国後に高祖が称臣したのに対し、契丹の太宗は称臣、上表せずに家人の礼を用いて兒皇帝と称するように指示したのである。¹⁵しかし、高祖の死後に出帝が嗣いだ時のこととして、『資治通鑑』卷二八三・後晉紀四・天福七年（九四二）一二月條に

帝之初即位也、大臣議奉表稱臣、告哀於契丹。景延廣請致書稱孫而不稱臣。……帝卒從延廣議。契丹大怒、遣使來責讓、且言、何得不先承稟、遽即帝位。

とあり、『旧五代史』卷八八・景延廣伝・同年條にも

少帝既嗣位、……朝廷遣使、告哀契丹、無表致書、去臣稱孫。契丹怒、遣使來讓。

とある。この二つの史料を勘案すると、出帝は契丹に表を用いずに「致書」と称し、かつ称臣しなかったので、契丹の怒りを買った。このことからすると、高祖の時に称臣及び上表をしなかったとしたとしても、その時の国書に「致書」の文言を用いたかどうかは不明である。¹⁶

五代後期の後漢（こうかん）と後周とでは、僅か五年間の王朝であった後漢には国書に関する史料はない。後周については、『遼史』卷五・世宗・天祿五年（九五二）二月條に、後周から契丹への使者に関して「周遣姚漢英・華昭胤來、以書辭抗禮、留漢英等」とあり、後周が契丹に対して対等の書式を用いたことが察せられるが、それが書頭の様式に関わるものであったかは判らない。むしろこの時期には、契丹と十国の諸国や後周と十国の諸国の間の文書が伝えられている。『資治通鑑』卷二九〇・後周紀一・太祖広順元年（九五二）四月丁未條の後には

契丹主遣使如北漢、……北漢主使鄭珙以厚賂謝契丹、自稱姪皇帝致書於叔天授皇帝、請行冊禮。

とある。これについて中西氏は、親族呼称附きの「致書」文言が具体的に示された最初の例ではないかとする。後蜀から後周への国書

としては、王明清『揮麈後録』巻五に

三朝史孟昶傳云、……周世宗既取秦・鳳・昶（孟昶）懼致書世宗、自稱大蜀皇帝。世宗怒其抗禮不答。其書眞迹今藏樓大防所、用錄于左。七月一日、大蜀皇帝謹致書于大周皇帝閣下。

とある。『資治通鑑』巻二九二・後周紀三・世宗顯德二年（九五五）一〇月壬申條の後に対応する記事があり、これは九五五年のことであると思われる。

また、契丹から南唐への国書としては、陸游『南唐書』巻一八・契丹伝に

元宗嗣位、遣使者公乘鎔。……既至而契丹亂、兀欲被弑、弟述律遣元宗書曰、大契丹天順皇帝謹致書大唐皇帝闕下。

とある。耶律兀欲は契丹の世宗、耶律述律は穆宗で、これは九五一年の国書となるが、君主の弑殺という事態があつたせいから完全に對等な形式となり、そこに「謹致書」と「謹」字の使われていることに注意する必要があるであろう。しかし、南唐が後周に滅ぼされる直前になると、『資治通鑑』巻二九二・後周紀三・世宗顯德三年（九五六）二月條に

唐主遣泗州牙將王知朗齎書抵徐州、稱唐皇帝奉書大周皇帝。（中略）甲戌、徐州以聞、帝不答。

とあり、その後南唐は奉表称臣して後周に降伏した。降伏後の南唐に後周から送られた国書としては、『資治通鑑』巻二九四・後周紀五・世宗顯德五年（九五八）三月丁酉（一六日）條には「上賜唐主書、稱皇帝恭問江南國主」とあり、陸游『南唐書』巻二・交泰元年（九五八）三月壬辰（一日）條には

周帝始采唐報回紇可汗故事、答帝璽書、稱皇帝致書敬問江南國主。帝遣閣門承旨劉承遇上表、稱唐國主。

とある。五日違いの日附から見ると同じ事実を伝えていると思われるが、「皇帝恭問」と「皇帝致書敬問」とでは相違がある。「皇帝恭問」は他に類例がないし、後周が回紇に対する唐の国書の書式を採用したのであれば、これは致書を衍字として「皇帝敬問」の書式であつたとするのが妥当ではなからうか。

以上、五代については専ら中西氏の蒐集した史料の例を挙げたが、全体的にみると「皇帝謹致書」がむしろ對等な關係の書式であり、「皇帝敬問」は却つてより下位の国に授与した書式となる。皇帝から外国の君主に授与する最上位の国書冒頭の形式として、「皇帝敬問」

が通行していた唐とは明らかに違う情況が現れていたと言えよう。

五 宋代の契丹への国書

周知の如く、北宋や南宋は契丹（遼）及び金に対して兄弟・姪叔など、対等または宋がやや下となる関係を結んだ。国書の形式にもそれが反映するが、国書に関連する史料の多い『宋大詔令集』は南宋・高宗の紹興年間（一一三一～一一六二）の編集で、『統資治通鑑長編』は北宋に関する編年史であり、『三朝北盟会編』は徽宗・欽宗・高宗朝と遼・金との交渉の記録であって、孝宗（在位一一六二～一一八九）以後の記録はない。高宗朝の建炎（一一二七～一一三〇）・紹興年間の南宋と金との交渉の記録である『建炎以來繫年要録』には、本稿で引用するような史料は得られなかった。また、『宋史』『遼史』『金史』それぞれの全文と『宋会要輯稿』蕃夷を一瞥したが、宋の国書冒頭を著録した史料は見られなかった。そこで、以下には主に『宋大詔令集』に拠って、北宋を中心に宋代の国書の特徴について概括したい。ただし、紙数の関係から具体的な本文の内容については割愛し、冒頭の書式についてのみ言及する^①。

『宋大詔令集』では、金に対する国書は卷二二八・四裔一・大金に三例収録されているが、冒頭部分が掲げられているのは一例のみであるのである。契丹（遼）に対する国書を先に取り上げる。同卷・契丹一の次の文が冒頭部分の収録されている最初の例となる。

與契丹遺書

二月日、兄大宋皇帝致書于弟大契丹睿文英武宗道至德崇仁廣孝功成治定啓元昭聖神贊天輔皇帝闕下……不宣白

即位報契丹書

二月日、姪大宋皇帝謹致書于叔大契丹睿文英武宗道至德崇仁廣孝功成治定啓元昭聖神贊天輔皇帝闕下……姪大宋皇帝謹白

與契丹告哀書

二月日、姪大宋皇帝謹致書于叔大契丹睿文英武宗道至德崇仁廣孝功成治定啓元昭聖神贊天輔皇帝闕下……姪大宋皇帝謹白

以上の三例のうち、第一例は宋と契丹とが兄弟関係の時のものであるが、「皇帝致書于皇帝」の形式を取っている。天輔皇帝は聖宗（在位九八二〜一〇三二）であり、本文の文面から見ても、第一例は北宋の真宗（在位九九七〜一〇二二）の崩御の時のものである。次の第二例は真宗を継いだ仁宗（在位一〇二二〜一〇六三）の即位を伝えたもので、真宗の子である仁宗は契丹の聖宗に対し、一時的に「姪」を名乗ったのである。「皇帝謹致書于皇帝」と、「致書」の上に「謹」字を加えており、末尾も「不宣白」のみの第一例に対し、「姪大宋皇帝謹白」と「姪大宋皇帝」を繰り返した上に「謹」字を加えている。以上の例から、宋代では「致書」が対等な国家間で用いられていることは明白であるが、宋の皇帝の排行が下になる場合には更に譲歩した表現形式になっているのである。また、第三例は、仁宗の立場から改めて真宗の崩御について伝えた文書である。同巻の契丹に対する国書の最初の例は真宗・景德元年（一〇〇四）元年十月丙午の澶淵の盟に関係する「與契丹國主書」であるが、「密邇封壤、遐慕聲猷（下略）」とあり、『宋大詔令集』ではこのような特定の事項に関する国書は概ね冒頭の部分は省略されている。以下には、冒頭の部分を収録する例を瞥見する。

まず、賀契丹生辰國書があり、卷二二八には次の例が収録されている。

正月日、兄大宋皇帝致書于弟大契丹聰文聖武英略神功睿哲仁孝皇帝闕下……不宣白

続けて「問候契丹皇太后書」として

正月日、姪大宋皇帝謹致書于嬸皇大契丹儀天體道至仁廣德慈順章聖皇太后闕下……不宣謹白

の例があるが、これは遼の興宗（在位一〇三二〜一〇五五）の誕生日を祝う「賀契丹生辰國書」と併せて皇太后に送られた国書である。皇帝を弟とするのに対し皇太后を嬸おばと表現し、皇帝に対して「致書」「不宣白」と称している部分は、「謹致書」「不宣謹白」とそれぞれ「謹」字を加えている。当然、排行が上となる皇太后に対する配慮である。なお、以上の例では宋の皇帝は「大宋皇帝」とのみ称しているが、遼の皇帝や皇太后に対しては徽号を省略せずに称している。これは唐代の国書には全く見られなかった新例である。¹⁸⁾

同書卷二二九〜卷二二二にも類例は数多く収録されている。ただ、微妙に用法の違う例も多いので、卷二二九についてのみ冒頭の部分を略さず収録している例の標題を煩を厭わず列挙する。『宋大詔令集』は南宋初期に編輯されているので、以下に見える標題は内容を良く現しているように思われる。卷二二九には賀契丹生辰書・問候契丹皇太后書のセットがあり、卷末近くの皇帝賀契丹生辰書・皇

帝請契丹皇帝達皇太后礼物書も同類であるが、後者は契丹の皇帝に皇太后に対する礼物を届けるよう依頼する内容となっている。前に戻って、回謝契丹皇帝書・回謝契丹皇太后書は契丹の皇帝や皇太后の発信した文書に対する謂わば礼状である。回謝契丹告哀書・回謝契丹皇太后告哀書は契丹の先帝（文成皇帝¹⁹）の崩御を告げた契丹の皇帝・皇太后の文に対する返書である。この巻の以下の文の称谓は、全て伯大宋皇帝・姪大契丹皇帝、また姪大宋皇帝（一例のみ姪大宋家皇帝）・嬪大契丹太皇太后である。次の回契丹太皇太后回謝書・回契丹回謝書はそれぞれ契丹の先帝の崩御に対して贈った贈物に添えた、太皇太后や皇帝に対する文書である。回契丹皇帝告哀書は契丹の太皇太后の死去を伝えた文書の返書である。賀契丹正旦書・賀契丹太皇太后正旦書は、正月の挨拶である。回契丹賀正旦書・回契丹達皇太后賀正旦書は、契丹の正旦の挨拶に対する返書で、達皇太后の方は皇太后に対する返書の伝達を依頼したものである。回契丹賀乾元節書・回契丹達皇太后賀乾元節書は、宋の皇帝の誕生日（乾元節は仁宗の誕生日）の契丹側の祝いの書に対する返書であり、達皇太后は右と同様の皇太后に対する伝達の依頼である。

卷二三〇では以上と違う例を挙げる。皇帝登宝位報契丹皇帝書・皇帝登宝位報契丹皇太后書は皇帝の即位の前に先帝の崩御を告げた文で、宋帝は兄、契丹の皇帝は弟である。皇帝回謝契丹皇帝書・皇帝回謝契丹皇太后書は契丹の皇帝・皇太后の仁宗の追悼文に対する返書である。皇帝回契丹皇帝賀登宝位書・皇帝回契丹皇太后賀登宝位書は、契丹の皇帝・皇太后の宋・英宗の即位を祝った文に対する返書である。皇帝賀契丹皇太后生辰書・皇帝問候契丹皇帝書は、契丹の皇太后の誕生日に対する祝いの書と、併せて皇帝にも贈った文書である。皇帝賀大遼皇帝生辰書・皇帝問候大遼皇太后書は、契丹の皇帝の誕生日に関する同類の文書であるが、国号は遼となっている²⁰。ただし、宋帝は兄、遼帝は弟である。皇帝回契丹皇帝賀寿聖節書・皇帝回契丹皇太后賀寿聖節書は宋帝の誕生日（寿聖節は英宗（在位一〇六三〜一〇六七）の誕生日）に対する契丹の皇帝・皇太后の祝いの文に対する返書であろう。英宗皇帝與大遼皇帝遺書・英宗皇帝與大遼皇太后遺書は、英宗の死去を伝えた文書（遺書）である。次の皇帝賀大遼皇帝生辰書・皇帝問候大遼皇太后書から姪大宋皇帝と叔大遼皇帝、及び姪孫大宋皇帝と叔祖母皇太后となっている。皇帝回大遼皇帝賀同天節書・皇帝回大遼皇太后賀同天節書は宋の神宗（在位一〇六七〜一〇八五、同天節は神宗の誕生日）に対する契丹の祝いの文への返書である。卷二三一の事例は省略し、卷二三二については次の回大遼皇帝賀天寧節書のみを挙げておく。

十月日、姪孫大宋皇帝謹致書于叔祖大遼聖文神武全功大略聰仁睿孝天祐皇帝闕下……不次謹白
とあるが、文中に「初紀誕彌之節」とあるので、これも宋帝の誕生日の祝いの文に対する返書である。²⁾

以上を纏めると、まず宋の皇帝自身の崩御を伝えた遺書や次の皇帝の即位を伝えた即位報契丹書、契丹（遼）の皇帝の誕生日を祝う賀生辰書、契丹の皇帝の発した文書に対する回謝書、契丹皇帝の崩御を告げた文に対する回謝告哀書、契丹の崩御した皇帝に対する香典に添えた回謝書、正月の挨拶の賀正旦書、契丹側の正月の挨拶に対する返書の回賀正旦書、契丹側の追悼文に対する返書の回謝書、宋帝の即位に対する契丹側の祝いの文の返書である皇帝回契丹賀宝位書もあり、契丹の皇太后の誕生日の祝いの賀契丹皇太后生辰書もある。この他、宋の皇帝の誕生日を祝う契丹の文に対する回書もあった。即ち、双方の皇帝の崩御・即位・誕生日や新年の挨拶に、国書や契丹側の国書に対する返書等が定例として発信されたのであり、契丹の皇太后に対する文書がセットとなる場合も多かった。その他の一般的な宋―契丹間の国書の冒頭は『宋大詔令集』では省略されているが、真宗・景德元年の澶淵の盟の誓書では「維景德元年、歲次甲辰、十二月庚辰朔七日丙戌、大宋皇帝謹致誓書於大契丹皇帝闕下」（下略）とあり、契丹側の文書には「維統和二十^マ（二十二）年、歲次甲辰、十二月庚辰朔十二日辛卯、大契丹皇帝致誓書與大宋皇帝闕下」（下略）とあるので、『統資治通鑑長編』巻五八、同年十二月辛丑條註）、通常の国書の遣り取りでも書頭には「大宋皇帝致書」「大契丹皇帝致書」の文言が用いられたものと推定される。

なお宋と契丹との間の国書冒頭の称謂は、初めは宋を兄とし契丹を弟とする関係であったが、宋の皇帝が死去して新皇帝が立つ時には、一時的に宋皇帝を姪、契丹皇帝を叔と称した。その後、一時宋の皇帝を伯、契丹の皇帝を姪と称する時期があるが（『宋大詔令集』巻二二九）、これは宋の仁宗の在位中（一〇二二―一〇六三）に契丹の皇帝が興宗（在位一〇三一―一〇五五）からその子の道宗（在位一〇五五―一一〇二）に代わり、仁宗と道宗との間では仁宗を伯、道宗を姪とする関係が継続していたため、と解釈できる。その後、再び宋皇帝を兄として契丹皇帝を弟とする関係に戻るが、宋の英宗崩御後は宋を姪、遼（契丹）を叔と称し、さらに「姪孫大宋皇帝謹致書于叔祖大遼聖文神武全功大略聰仁睿孝天祐皇帝闕下」とする例が、巻二二二―二二四に三例存する。これは遼の道宗の在位期間が長く、その間に宋では英宗の子の神宗（在位一〇六七―一〇八五）、神宗の子の哲宗（在位一〇八五―一一〇〇）と代わり、神宗が道宗に対して姪を称し、さらにその子の哲宗が姪孫を称したものと解釈できる。従って、宋と契丹（遼）との関係は基本的には

兄弟関係で一貫していたのである。

六 宋代の金への国書

『宋大詔令集』では金に対する国書は卷二二八・四裔一・大金に三例収録されているが、冒頭部分が掲げられているのは「報聘大金國書」(宣和二年(一一二〇)九月差登州兵馬鈐轄武義大夫馬政特書—原注)の「大宋皇帝謹致書於大金皇帝」一例のみである。これは『三朝北盟会編』卷四・同年九月二十日條の「朝廷國書、九月日、大宋皇帝(下略)」の国書であり、同書同卷七月十八日條にはこれに先立つ「金人國書、七月十八日、大金皇帝謹致書于大宋皇帝闕下(下略)」の文書が著録されている。このように、宋—金間の国書に關連した史料は基本的に『三朝北盟会編』に記録されており、右の二通以外について冒頭部分を中心に列挙すれば以下の通りである。

(一) 卷四・宣和三年(一一二二) 正月條

金人國書、正月日、大金皇帝致書于大宋皇帝闕下。

(二) 卷五・宣和三年八月二十日條

朝廷國書、八月日、大宋皇帝致書于大宋皇帝闕下。

(三) 卷七・宣和四年(一一二二) 五月十八日條

金人國書、五月日、大金皇帝致書于大宋皇帝闕下。

(四) 卷一三・宣和五年(一一二三) 正月五日條

朝廷國書、書曰、正月日、大宋皇帝致書于大金皇帝闕下。

(五) 卷一三・宣和五年正月二十七日條

金人國書、書曰、正月日、大金皇帝致書于大宋皇帝闕下。

(六) 卷一四・宣和五年二月六日條

朝廷國書、書云、二月日、大宋皇帝致書于大金皇帝闕下。(中略、九月癸巳條) 金人國書、書云、使軺薦屈、營訊迭承。(下略)

(七) 卷三〇・靖康元年(一一二六) 正月二五日條

書曰、大金皇上都經畧處置使斡離不上書於大宋皇帝闕下。

(八) 卷三一・靖康元年(一一二六) 正月二四日條

書云、大宋皇帝致問於大金皇子郎君。

(九) 卷三六・靖康元年(一一二六) 二月八日條

上賜宴于斡離不軍中、斡離不上書辭別。

書曰、大金皇子郎君斡離不等謹上書於大宋皇帝闕下。(下略)

簽書樞密院事宇文虛中・知東上閣門使王球充送路使副、持書叙別

書曰、大宋皇帝致書于大金皇子郎君・皇弟國王・皇弟都統。

(一〇) 卷五〇・靖康元年(一一二六) 七月望日(三〇日) 條

是月望日、遣使金人元帥皇子二書

宣和錄曰、七月望日、大宋皇帝致書大金國相元帥。(下略)

七月望日大宋皇帝致書大金皇子郎君。

(一一) 卷五八・靖康元年(一一二六) 一〇月一八日條

書曰、大金骨盧你移賚勃極烈左副元帥・皇子右副元帥同致書於大宋皇帝闕下。(下略)

靖康要盟錄曰、先是於四月因虜使蕭仲恭等還、朝密賜耶律太師以黃絹寫之云、大宋皇帝致書於左金吾衛上將軍・右都監耶律太師。

(下略)

書曰、姪大宋皇帝致書於伯大金皇帝闕下。

(一二) 卷八五・靖康二年(一一二七) 三月二二日條

書曰、大楚皇帝邦昌謹致書于國相元帥・皇子元帥。

(一一三) 卷九九 諸録雜記

范仲熊北記曰、(中略) 有番官梁慶裔來叫仲熊曰、國相有台旨、有國書送你歸。書題曰、書致于南朝皇帝闕下。骨盧你移齋勃極烈左副元帥、不寫姓名、只用一元帥府印。下云、謹封書云、天會五年(一一二七)四月日、骨盧你移齋勃極烈左副元帥謹致書于南朝皇帝闕下。

(一二四) 卷一七四・紹興七年(一一三七)正月一五日條

自靖康(一一二六)來、國書往返多矣、至渡江盡失之。自建炎來、國書或出于執政、或出于翰林學士、其副本皆未嘗付之有司。其詞意之輕重、信幣之多寡、使人之官品、與往來之語録、皆不可考。

(一二五) 卷二五〇・紹興三二年(一一六二)閏二月條

閏二月、洪邁先通金人使副書。

書曰、(中略) 蓋自古以來、鄰邦往來、並用敵國禮。向者本朝皇帝、上爲先帝、下爲生靈、勉抑尊稱、以就和好。

これらで見ると、「皇帝致書」の対象が、皇子や國相元帥など、金の皇帝のみに止まっていなかったことが注目される。五代の國書を検討したところで、「致書」文言を家人の礼で用いる文言である、とする見解を紹介したが、これだけ「皇帝致書」の対象が広がると、それを君臣の礼ではなく家人の礼で用いる書式である、という説明原理が登場するのも確かに無理のないことのようにも思われる。また、最後の洪邁の金人の大使・副使に対する文には「自古以來、鄰邦往來、並用敵國禮」とあり、中国王朝が対等な異民族と交渉する時には敵國礼を用いる、と述べている。唐代までの國書冒頭の形式が、最上位の相手に対する場合に「皇帝敬問」であったことは本稿で確かめた通りであり、敵國關係でそれが用いられたと見ることは、やはり差し支えないとすべきであろう。(一二四)に述べられているように、宋—金間の國書はかなり失われているので確言はできないが、以上の例では國書中に在位中の皇帝の徽号は記されていない。

また、『金史』卷六・世宗紀上・大定五年(一一六五、南宋・孝宗の乾道元年)正月條には、「己未、宋通問使魏杞等以國書來、書不稱大、稱姪宋皇帝、稱名、再拜奉書于叔大金皇帝」とある。これに従えば、南宋の孝宗は乾道五年に金の世宗に対し、「姪宋皇帝しん再拜

奉書于叔大金皇帝」という国書を発している。

契丹・金以外の国々に対する国書については一瞥に止める。宋代では、契丹・金の西にある西夏と東にある高麗とが、異民族の中では契丹・金に次ぐ重要な位置を占めていた。『宋大詔令集』卷二三三―卷二三六に西夏への国書が収録されているが、冒頭の部分が略されていない例では「門下」(仁宗・乾興元年(一一〇二二))「勅」(仁宗・天聖三年(一一〇二五))、「勅」字は原文に従う)、「勅」(仁宗・慶曆四年(一一〇四四))、詔(慶曆七年以降、多数)、「勅」(哲宗・元符二年(一一〇九九))となり、基本的に仁宗の慶曆七年以降は詔の文書が下された。詔・敕では詔が大事、敕が小事に用いられるので、宋は西夏に対してはある程度上位の臣下の国として扱っていたであろう。高麗への国書は卷二二七に収録されており、門下(太宗・淳化元年(九九〇))、制詔(淳化五年(九九四))の他は勅が一〇例である。それらには概ね年代が記されていないが、恐らく淳化五年以降であろう。西夏の詔に比べて勅の高麗はやや低い位置を与えられていたのである。卷二三八には交趾への国書が収録されており、門下が九例あるほか、勅が一〇例ある。一例は「討交趾勅榜」と題され、交州管内峒軍民官吏等が対象である。交趾郡王や南平王を冠されている例もあり、高麗と共に宋の冊封を受けている。しかし、契丹・金に隣接して国際的に両者に次ぐ地位にあった高麗よりは、交趾は低い扱いを受けていたのではなからうか。卷二二九では大理国王に対する門下が一例、その他西蕃でも勅の例もあるが門下の例も多い。卷二四〇の西蕃も同様である。

同巻の諸蕃については挙例は省略するが、「賜甘州回紇天聖五年麻日勅書」に「皇帝舅問甘州回紇外甥歸忠保順可汗王夜落隔」とあるのは、宋代の「皇帝問」の唯一の例である。仁宗の天聖五年の暦日を授与するのであるから、この文書は天聖四年(一一〇二六)のものであろう。次の一文は標題に「甘州外甥回紇可汗王夜落隔可特進懷寧順化可汗王制」とあり、本文は「勅」で始まっているので、「皇帝問」は本来「勅」で対処する相手への特例であったのであろう。この文の末尾には「可特進懷寧順化可汗王」とあるので、夜落隔が本人の名前である。図らずもこの例から、「皇帝問」と「勅」との親近性が確認されたことになる。なお、宋朝の例ではないが、『金史』卷三八・志一九・礼一一・新定夏使儀注に

第三日入見。(中略)使副鞠躬再拜、引少前、跪奏「弟大夏皇帝致問兄大金皇帝、聖躬萬福」。

という、金の宮中における儀注が記されている。これは使副すなわち大使と副使、おそらく大使の挨拶であり、「弟大夏皇帝致問兄大

金皇帝」という文書が持参されたのか、口頭のみ表現であるのかは不明であるが、金と西夏の間では皇帝から皇帝への「致問」という表現も用いられたのである。前引の『三朝北盟会編』の(八)にも「大宋皇帝致問於大金皇子郎君」という文言が引かれていた。

おわりに

以上、唐代から宋代までの国書冒頭の諸例を検討してきた。隋代には突厥側の「致書」文言の国書も登場するが、唐代の国書冒頭の書式は「皇帝敬問」「皇帝問」「敕」の三形式に限られて最末期まで続いた。「致書」が用いられた例は、冒頭の部分だけが記録された日本に対する一例以外は、節度使から吐蕃や回鶻の有力な臣下に送られた文書のみであった。従って、唐及びそれ以前の王朝では、敵国関係でも相手側の君主には「皇帝敬問」のみが用いられることは認めて良いであろう。

五代になると一転して「皇帝致書」が頻繁に用いられるようになり、契丹(遼)・金との関係が対等かやや下位になる宋代になると「皇帝致書」が一般的になり、契丹の皇太后にも「嬪」として皇帝の国書が発信されたほか、『三朝北盟会編』の諸例では皇子等にも国書が発信され、皇帝からの国書が発信される範囲は相手国の君主以外にも拡大している。それを家人の礼の範疇で説明する試みも登場するが、中国の皇帝と異民族の君主等との間を君臣関係で把握し、中国王朝にとって止むを得ない場合に一時的に敵国関係を承認した、唐代までとの大きな差をそこに認めることができる。宋代には契丹及び金との関係が対等となることは周知のことであるが、それは国書の形式に反映しただけでなく、国書授与の対象の拡大という形でも変化していたのである。また契丹への国書では、宋の皇帝を姪、契丹皇帝を叔と称したり、或いは宋帝を伯・姪・姪孫と称し、契丹皇帝を姪・叔・叔祖と称する例も存在したが、それはそれぞれの皇帝の交替に伴う一時的な呼称の変化であり、宋と契丹(遼)との関係自体は兄弟で一貫していたとみられる。一方、宋に対して従属的な位置にある甘州回紇に対しては、「勅」の他に「皇帝問」の形式の文書も用いられ、勅の書式と皇帝問の書式との親近性が確認された。また、「致問」という例も僅かながら見られた。

以上から、宋になっても「皇帝問」系統の文書が消え去ったわけではなく、「皇帝敬問」の文言が「皇帝致書」の文言に置き換わっ

たのであり、それは唐と宋との間の国際関係の変化を国書冒頭の書式から象徴するものであった、と結論することができる。そこで唐以前の書式について振り返ると、唐代では論事敕書は「敕」、慰勞制書は「皇帝問」が基本であって、「皇帝問」の上位の特例として「皇帝敬問」の書式が存在する。しかし特例であるので、「皇帝問」と同様の君臣関係の範疇で用いられる場合もあり、また封敕の「皇帝舅敬問贊普外甥」文書の所で述べたように、唐と吐蕃とを兩國と認め合うような、敵国関係の書式としても用いられる場合もあった、と概括できるのではなからうか。

註

- (1) 「唐代の国際文書形式」、拙著『古代東アジア世界史論考―改訂増補隋唐の国際秩序と東アジア―』所収、八木書店古書出版部、二〇一九年、初出は一九七四年。
- (2) 中村裕一『唐代制勅研究』汲古書院、一九九一年、第二章「慰勞制書（慰勞詔書）」参照。
- (3) 中村氏は「慰勞制書の起源」で、『広弘明集』巻二〇の皇太子綱「上大法頌表」に対する返書として梁・武帝の「皇帝問太子。省表并見所製大法頌、辭義兼美、覽以欣然」という一文を挙げている。正史の例を列挙した前稿では触れなかつたのでこの機会に紹介し、参考までに「上大法頌表」の冒頭と末尾の文を以下に引いておく。皇太子綱は武帝の後に立った簡文帝であり、さきの「皇帝問」の一文は「云云」の後に続く。
臣綱言。臣聞、至理隆而德音闡、成功臻而頌聲作、在於奚斯考甫、神雀嘉樹或止、事盛乎區中、慶昭乎一物、猶且手舞足蹈、傳式方來。……謹上大
法頌一首、曹丕從征之賦、劉担遊侍之談、曾無連類、伏兼悚慙、不勝喜悅之誠、謹遣扶詔鍾超寶、奉表獻頌、以聞。臣綱云云。
- (4) 初例は開皇四年（五八四）の突厥沙鉢略可汗の文帝に宛てた国書である。拙稿「隋唐交代と東アジア」、註（一）所掲拙著『古代東アジア世界史論考』所収、初出は一九九二年、参照。
- (5) 『善隣国宝記』所収の倭国・日本に対する国書冒頭の諸例については、拙稿「唐代国際関係における日本の位置」、註（一）所掲拙著『古代東アジア世界史論考』所収、初出は一九九八年、参照。
- (6) 例えば、森公章「聖神皇帝と日本」（『唐代史研究』第二四号、二〇二二年）は、当該国書が第八次遣唐使に与えられたものであるとすれば、執節使の

- 粟田真人に与えられるであろうから、この国書は次の第九次遣唐使に与えられたものである、と拙見を批判する、しかし、第九次遣唐使に与えられたとすれば、なぜ第九次遣唐使の正式の大使（押使）である多治比県守に授与されなかったのか、という同様の疑問が生じるので森氏の見解には従えない。
- (7) 註(5) 所掲拙稿「唐代国際関係における日本の位置」参照。また、第八次遣唐使が長安入りした時の情況については、拙稿「則天武后と杜嗣先墓誌——粟田真人の遣唐使と関連して——」『国史学』第一九七号、二〇〇九年、参照。
- (8) 註(1) 所掲「唐代の国際文書形式」。拙著『古代東アジア世界史論考』三二一～三二八頁。
- (9) 佐藤長「ダルマ王の在位年次について」『史林』第四六卷第五号、一九六三年。佐藤氏は、使者の名は『新唐書』の論贊熱が正しいとする。
- (10) 土肥義和「燉煌発見唐・回鶻間交易関係漢文文書断簡考」、同氏『燉煌文書の研究』所収、汲古書院、二〇二〇年、初出は一九八八年、参照。なお、編年史料の乏しい九世紀後半の唐朝の国際秩序については、土肥氏の『翰林学士院旧規』の周到な分析に依拠した別稿を準備中であるが、拙稿「渤海をめぐる唐代の国際関係」(清水信行・鈴木靖民編『渤海の古城と国際交流』所収、勉誠出版、二〇二一年)は、九世紀代の唐の国際関係の変化を編年史料を主に追っているので、併せて参照されたい。
- (11) 李鴻賓「唐朝朔方軍研究兼論唐廷与西北諸族の關係及其演變」(吉林人民出版社、二〇〇〇年) 附録二「朔方節度使任職表」では、王侁の靈鹽節度使離任の時期を元和八年(月は不詳)とする。なお、李光進の「靈州大都督府長史・靈武節度使」の「靈武節度使」は「靈鹽節度使」の誤記か。
- (12) 中村裕一「唐代公文書研究」汲古書院、一九九六年、第二部第一章「会昌一品制集」にみえる「奉勅撰」と「奉宣撰」参照。
- (13) 拙稿「賜吐蕃宰相尚結贊書」三首について『東方学』第一四四輯、二〇二二年、参照。
- (14) 中西朝美「五代北宋における国書の形式について——「致書」文書の使用状況を中心に——」九州大学東洋史論集』三三三、二〇〇五年。
- (15) 「君臣の礼」と「家人の礼」との相違については、尾形勇『中国古代の「家」と国家——皇帝支配下の秩序構造——』岩波書店、一九七九年、参照。
- (16) 中西氏は註(14) 所掲論文で、後晉の高祖は敵国礼ではなく、飽くまで「家人礼」として「致書」形式の国書使用を認められた、と判断している。
- (17) 呉曉萍(蘋)『宋代外交制度研究』(安徽人民出版社、二〇〇六年) 第五章「外交文書研究」には、宋が契丹(遼)・金その他の国々に発信した国書が概述されている。
- (18) 中国で、皇帝の榮譽を飾る徽号(尊号)を在位中の皇帝に加える習慣が始まったのは、唐の高宗(在位六四九～六八三)朝に則天武后が皇后となって

からのことである。戸崎哲彦「唐諸帝号攷（上）——阜陶から睿宗まで——」（『彦根論叢』第二六四号、一九九〇年）、「唐諸帝号攷（下）——殤帝から哀帝まで——」（同誌第二六六号、同年）、同氏「古代中国の君主号と「尊号」——「尊号」の起源と尊号制度の成立を中心に——」（同誌第二六九号、一九九一年）等参照。しかし、皇帝自身が国書中に在位中の徽号を自称として用いることは、唐のみならず宋になってもなかったことになる。

- (19) 回謝契丹告哀書・回謝契丹皇太后告哀書には共に「文成皇帝上僊」とあるが、興宗（在位一〇三一～一〇五五）は、崩御前年の重熙三年（一〇五四）一月に欽天奉道祐世興曆武定文成聖神仁孝皇帝の尊号を受けている。

- (20) 『宋会要輯稿』第一九六冊・蕃夷二の英宗・治平二年（一〇六五）二月條には「是月、雄州言得涿州牒報、契丹國改爲大遼國」とあり、契丹から遼への改称の情報は治平二年二月に宋に齎された。

- (21) 『宋史』卷一九・徽宗紀一・建中靖国元年（一一〇二）十月條に「丁酉、天寧節、羣臣及遼使初上壽于垂拱殿」とあり、本文に引いた国書がこの遼使の上寿に対する返書であることが確認できる。この引用文から判るように、天寧節は徽宗の誕生日である。

〔追記〕 最初の原稿の査読で、廣瀬憲雄氏以降の宋代後の対契丹・金への国書書式やその授受儀礼を検討した論考への言及がないのは疑問である、との意見があった。また、新見まどか「皇帝並立時代の幕開け——『錦里耆旧伝』所収、後梁・前蜀問国書考——」（『唐代史研究』第二五号、二〇二二年）では、唐代の致書文書に言及している。従って、以上のような感想は当然出るのであろうから、一言弁明しておく。溯れば五十年前、本稿は卒業論文「唐代の国際文書形式について」（一九七二年一月提出）の続編として修士論文で作成するつもりであった。修士課程在学中に宗旨替えして修論は漢唐間の皇帝祭祀に関するものとしたが、『宋大詔令集』『三朝北盟会編』はその間にも手に取っており、本文の「六 宋代の金への国書」に列挙した史料はその折に見出したものである。本文中に記したように、元来一編の論文にするつもりであった前稿と分けて本稿を作成したので史料は宋末まで探索したが、結局は修論準備中に目標としていた北宋末までの史料を基本に用いることになり、五十年間の宿願を達成するという当初の意図通りに、唐代までの国書冒頭の形式との連続、非連続を主眼として本稿を執筆した。宋と契丹や金、ことに南宋と金との関係については本稿とは別の論点が必要となるので、それらの問題については去り行く老兵ではなく、若手・中堅の研究者の検討に委ねたい。